

竹内三統流

竹内中務太輔源久盛

沿革

竹内三統流は、作州の住人竹内中務太夫源久盛（現在岡山県久米郡鶴田村角石谷竹内家の祖）が、愛宕神靈より、五件の捕手を授けられしを以つて開祖とし、御奈良天皇天文元年六月廿四日（紀元二一九二年）の事と伝へられる。

後之を竹内常陸助源久勝に伝授、久勝之を竹内流小具足腰の廻りと唱へ諸国を遍歴すること数年、王城の側面に道場を開いて、数百の子弟を教養した。

後水尾天皇元和六年、悉くも天聰に達し、叡覽御賞普あらせ給ひ、日下捕手開山の称号を賜はり、普く天下万民を教導すべき様御繪旨あらせられたるにより、益々志を励まし天下を周遊し、数千の同志を得たり。

爾来竹内加賀之助久吉、荒木人斎（同一人か仁斎とも記すものあり）中村大蔵行春、渡辺助之進重

正、小堀虎之助元方、武州住人隈部六郎左衛門親論、を経て東肥住人戸田助左衛門勝就より矢野仙右衛門親英に伝へられ、親英は東肥住人高森太郎兵衛惟右の伝と併せ以て一流としたるものが、今日熊本に於ける矢野氏の竹内三統流の初めである。

矢野家竹内三統流伝統

矢野親英の子彦左衛門広英は父より同流を受継ぐや、之を大成せんと志し、天保十二年藩公の許可を得て、作州の宗家竹内藤一郎久雄及高弟竹内雅門太久吉に師事して切込琢磨大いに研鑽の後四国、中国、大阪、京都等を武者修業の上帰藩以来更に研究を遂げ、従来の手致（型）を加除修正し一流を工夫した。其後弘化元年三月再び作州の宗家を訪ね、更に其技を磨き、刀術（居合）をも修め帰藩の後盛大に門弟を教養した。

其の子矢野司馬太広則之を継ぎたるも壮年死去し、城家より広次入りて矢野家を嗣ぎ、維新後に於ける同流の隆昌は一に同師の力に依ると云はれる。享年八十有三歳時に大正八年六月二十九日歿。因に広次の死後其の子官吏として他地に在る為遺言により高弟黒川秀義師範代見となる。

竹内三統流兵法

- 一、專手 十二手
- 一、返投 八手
- 一、居業捕 十手

中極意

- 一、小具足 十三手
- 一、打合捕並八ヶ条 五手、八手
- 一、甲身捕 十二手变化四十八手

皆伝

- 一、奥奔手 八ヶ条

- 一、後捕脇捕 四手

神
伝

一、五件捕手

中
死
活

一、死 十四手

一、活 十四手

極
意

一、二十三ヶ条

繩

一、六寸繩

一、三尺繩

一、軍繩

第九捕縄其他

- 一、六寸縄ノ事 二、早縄ノ事 三、捕者ノ事 四、三尺縄ノ事 五、乱心者殿中ニテ捕縄ノ事
六、死人運ノ事 七、奏者捕ノ事 八、小道橋上心得ノ事

第十歌の巻

- 一、和とは敵の力を我ものに
なしてそ勝はとると知るべし
- 二、我よりも業なき事の和なり
敵のしかけに勝はあるべし
- 三、起臥にかち有道の和なり
深き心の浮木うきふね
- 四、つよみにてかゝれる敵を勝事は
まりに柳の心にそする
- 五、敵よりもふいをしかくる事あらば
はつと松風村雨の音
- 六、うごかざる者は大事の敵と知れ
さそうは水の月か稻妻
- 七、屋合や又幻になして見よ
あとは心のまゝにこそとれ

八、大勢にかこまれぬれば向敵

あたりてやみと成すは月陰

九、うたかひのふかき心の人にこそ

まことの道を何とつたへむ

十、山高き事を思はば海深き

心をなして我と知るべし

十一、心さし誠の道をなす人に

大事残さず念頃にせよ

十二、我独うへなきものと思ひなば

やがて大事の道を失ふ

十三、我道の事を昼夜忘るゝな

師のおしへをば深く守りて

十四、勝負は時によるとの事ぞかし

其大事をは心掛べし

十五、友人の其交りを成すとても

常に心に敵をあら

十六、我道を尋る人の有あらば

しらぬ顔して事をかたるな

十七、勝負をば常に好みてすべからず

むりの人には勝てせんなし

十八、もみち葉の深き心やせんだんの

其道筋を尋ね求めよ

十九、佛に立添ふものと見るうちに

敵を夢路となしてこそかて

二〇、霜をきく心をなして有ならば

敵なす人を我と知るべし

二一、行合に取べき敵の間積りに

常に工夫をなして見よかし

二二、身のがねの位ひを深く知りぬれば

うつ太刀のまも我とこそ

二三、ぬき打も払ふも切るも只一つ

まことの道を行きて勝つべし

二四、太刀かたなおのれにきれぬものなれや

只切る人の心知るべし

二五、うつ太刀のくらひを見こみ向ふへし

きるを頼みに入るは夏むし

二六、打つ太刀のこぶしつけて入りて見よ

抜れは先に鬨の戸もなし

二七、後より組合敵をぬくるには

はつとはつみ大事こそあれ

二八、私に深き習のあるそかし

只一筋の事を思ふな

二九、敵合をたいさんに見る心こそ

たによりおこる我はきりくも

三〇、我道のふかき習をさとりなば

只一筋のたいらかのみち

三一、さとりなはかけもかたちもなきかけの

かたちなきこそかたちなるらん

三二、遠くとも心に近き有明の

雲井の月を我独り見る

竹内三統流柔術

奥儀

第一甲身捕 一、具足を着したるときの手捌にして敵と我と互に遠く間を置き双方より前進し行会ひに術を行ふ 二、十二手にして立業に属す

一、腰詰 二、磯之波 三、脇詰 四、流水 五、車 六、前捌 七、後捌 八、甲返 九、組詰 十、遠山 十一、向要 十二、谷風

一、君不知 二、夢之投 三、肩投 四、柄落

第七神伝五件捕手

一、立合 二、居合 三、込添 四、風呂詰（付武者捌） 五、高上位

第八印可必勝伝六個条

一、鎧組 二、甲返 三、突手 四、身之剣 五、鷲落 六、惣真久里

先師の訓

一人に訓ふる術はあれども

敵に勝つの術は伝へず

戸田勝英先生の塔裏に

一とはるとも何か答へん野面なる

石より外に我有らばこそ

矢野広英先生の訓

一 大兵も小兵もいふな兵法は

心一つにある道と知れ

第二死活一当りと云ふ

① 一当りを一次きに投ぐると心得よ強く当りて用捨ばしすな一（先師の訓）

- 一、星合 二、人中 三、番拈 四、幻 五、陰月 六、松風 七、村雨 八、水月 九、心臓
十、電光 十一、上八枚 十二、月陰 十三、稻妻 十四、釣鐘

第三活中り

- ② 一、真闇 二、行則 三、草則 四、弱 五、縦

第四極意二十三箇条

- 一、乱勝（乱投） 二、戸入 三、楯詰 四、石火 五、鉄砲捕 六、向身 七、三先 八、霞
九、縛 十、陰陽穴 十一、間積 十二、目付 十三、息合 十四、虚実 十五、放心 十六、
残心 十七、三箇 十八、五箇 十九、甲身 二十、死活 二十一、変化 二十二、捕詰 二十
三、太刀合

第五齊手八箇条

- 一、殺詰 二、玄番留 三、監物留 四、中村留 五、捕詰 六、捕亡 七、差投 八、田原留
第六、後捕脇捕

刀術

表

- 一、一心二刀
- 二、切返
- 三、左剣
- 四、下け刀
- 五、鑑せり

極意

- 一、引落
- 二、肩投
- 三、後詰
- 四、虎乱
- 五、しめつけ

口伝及附手

- 一、構の事 上段 中段 下段 右左

- 一、打込差張流せり合

- 一、太刀筋

口伝 構は中段の母とす打は差と思へ差は打と思ふべからず、張は差を主とす、流は受くると思ふことなかれ、切返なり、足は行歩し、目は動くことなかれ体はそらずくまらず腹を出すなり

附 手

- 一、仕物太刀 必勝の身有合を大事とするも外に手の内の霧を使ふの注意も必要なり
- 二、介錯太刀 直身の躰を良とす
- 一、四方切 向の敵を柄にて当り後の敵を突き又向の敵を切り左の敵を切り右の敵を切る

印可仙洞の御製及古歌（拔萃）

一、移るとも月も思はず移すとも

水も思はず広沢の池

一、兵法を知りたるよしの手柄だて

知らぬにおとる笑止なりけり

一、勝負は時の運と心得よ

只下手ばかり負けるでもなし

一、師匠より直しの道は其形を

心にかけて一期わするな

一、他の家のよしや悪きの取沙汰は

此家にてはかたく法度ぞ

一、人見せに兵法たてをする人は

頓てすたと心得て見よ

一、兵法は器用もふ器もなきものを

精を出してすく人そよき

一、太刀の道勝れたりとも自慢すな

上には上の限りなきもの

一、天の下一にならん思ふても

只よう／＼に人なみと知れ

一、顔のこる癖の直らぬ人ならば

胸を入れよといふて直せよ

一、両足の引つる癖のあるならば

身を向はせて直すへきなり

✓ 一、後方へそる気のあるは右のかた

引あけすして癖を直せよ

一、鑓先に眼のつかはひるむへし

向の敵の手元見るへし

古 歌

一、吉野川其水上を尋れは

こけの岩をに平とくく

一、筑波根の岸より落る男女の川

恋そつもりて淵となりぬる

一、君が代は千代に八千代にさゝれ石の

岩となりて苔のむすまで

右兵歌集不憚愚(不明)

寛永三曆林鐘廿四日記

竹内久勝判

此一巻文久二年備中住難波伊右衛門所持之処借用写置者也

矢野広英